


2013年6月1日

エホバの王国を告げ知らせる ものみの塔

A photograph of a group of five men of various ethnicities laughing and talking in a garage. A dark-colored SUV is raised on a red hydraulic lift in the background. One man is sitting in a chair in the foreground, wearing a yellow jumpsuit and a green beanie. Another man is working on a wheel in the background. The scene is lit with warm, indoor lighting.

世界中から
偏見がなくなる
いつ？

特集記事

偏見

— 世界中にある問題 3ページ

世界中から偏見がなくなる — 一つ? 5

この号の別の記事

神に近づく — エホバは『不公平な方ではない』 8

幾世紀も埋もれていた宝 9

聖人に祈るのはふさわしいことですか 12

お子さんを教えましょう

— ある犯罪者との会話から何を学べますか 14

聖書の質問に答える 16

「ものみの塔」誌は、宇宙の支配者であるエホバ神をたたえます。神の天の王国が間もなくすべての悪を終わらせて地をパラダイスに変える、という良いたよりによって人々を慰めます。わたしたちに永遠の命を得させるために命をなげうち、今や神の王国の王として支配しているイエス・キリストに対する信仰を推し進めます。1879年以来ずっと発行されてきた本誌は、政治とはかわりを持たず、権威として聖書に固く従います。

さらに情報を得たいと思われませんか。あるいは、無料で行なえる家庭聖書研究をご希望ですか。

www.jw.org をご覧になるか、
下記の宛先にご連絡ください。

日本：
エホバの証人
〒243-0496 神奈川県海老名市
中新田四丁目7番1号

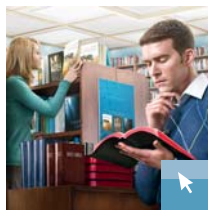
世界各地の他の宛先については、
www.jw.org/contact をご覧ください。

この出版物は販売を目的としたものではありません。世界的な聖書教育活動の一環として提供されており、その活動は自発的な寄付によって支えられています。聖句は、特に注記がない限り、現代語による「新世界訳聖書 — 参照資料付き」からの引用です。

The Watchtower 発行者：ものみの塔聖書冊子
協会 〒243-0496 神奈川県海老名市中新田四丁目
7番1号
© 2013 Watch Tower Bible and Tract Society
of Pennsylvania. All rights reserved. Printed in
Japan.



ウェブサイトを読める記事 | www.jw.org



エホバの証人についてのよくある質問
— 他の宗教を尊重していますか

(「エホバの証人について/よくある質問」をご覧ください)

本誌はウェブサイトから
様々な形式で
ダウンロードできます





偏見

世界中にある問題

韓国系アメリカ人のジョナサンは、子どもの頃、人種偏見による差別を受けました。それで、大人になって、自分が顔立ちや人種に基づいて判断されない所を探しました。そして、自分の容姿と似た人々が多く住んでいる、米国アラスカ州北部のある町で医師として働くようになりました。多分そこなら、北極圏の寒風にさらされるにしても、はるかに冷たい偏見という風にはさらされないだろう、と考えたからです。

ところが、その期待は打ち砕かれました。25歳の女性に医療を施した時のことです。その人が、意識を取り戻してジョナサンの顔を見るや、ののしるようにしてあざけり、韓国人に対する根深い侮蔑の念をあからさまに示したのです。ジョナサンはその悲痛な経験から、自分がその町に移転して人々に溶け込もうといくら努力しても偏見からは逃れられない、ということを感じ知らされました。

ジョナサンの経験は、厳しい現実を浮き彫りにしています。偏見は地上の至る所に見られるのです。人々のいる所ならどこでも偏見があるようです。

世界各地に見られる偏見

カナダ:「[国の]多様性が受け入れられ、様々な共同体の権利を保障するために数多くの法的、政治的規定が設けられているにもかかわらず、相変わらず人種主義が深刻な人権問題となっている」。—アムネスティ・インターナショナルによるカナダに関する報告、2012年。

ヨーロッパ:「ヨーロッパ人の48%は、自国における差別をなくす努力がほとんどなされていない、と考えている」。—「不寛容、偏見、差別：ヨーロピアン・レポート」(英語)、2011年。

アフリカ:「女性に対する暴力と差別は、今なお多くの国で広範囲に生じている」。—「アムネスティ・インターナショナル・レポート 2012」(英語)。

ネパール:「最下層民(“不可触民”)はその国特有の、とりわけ経済的、社会的、文化的な面で差別されている」。—「人権監視団 世界報告 2012」(英語)。

東ヨーロッパ:「東ヨーロッパのロマ民族は、外国では他人の罪を負わされ、故国では偏見によって差別されてきたが、政治家はだれ一人としてその問題を解決しようとはしない」。—エコノミスト誌(英語)、2010年9月4日。

偏見とは何か

研究者たちも、偏見というものをどう定義すべきか、難しく感じています。偏見とは、「一個人に対して、特定の集団の成員だというだけの理由に基づく消極的な見方や考え方のことである」と言う人もいれば、『ある集団の成員たちに対して不十分な情報に基づいて早計な判断を下してしまう』場合の、その見解のことである、と言う人もいます。いずれにせよ、偏見というものは、自分とは異なる人種、体型、性別、言語、宗教の人や、自分とはどこか違うように思える人に違和感を覚えることから生じます。

にもかかわらず、大抵だれでも偏見をすぐに非難します。これは全く矛盾したことです。非常に嫌われている事柄が、非常に広く受け入れられているのです。偏見を悪としながらも、自分自身の内に偏見があるということに気づいていない人が多いようです。あなたはいかがですか。

個々の人の問題

いずれにせよ、わたしたちにとって、自分の心に何らかの偏見があるかないかを見分けるのは難しいことです。その理由について聖書は、『何にもまして心は欺まんに満ちている』と述べています。(エレミヤ 17:9, ロザハム訳[英語])ですから、わたしたちは自分を欺いて、自分はどんな人にも寛容であると思い込んでいるのかもしれませんが。あるいは、特定のグループの人々に対して否定的な見方を持っているが、それには正当な理由がある、と考えているのかもしれません。

知らずに偏見を抱いているかどうか見極めることの難しさは、次のような状況にある自分を想像してみれば分かるでしょう。暗い夜道を一人で歩いています。すると、見知らぬ若い男が二人、近づいて来ます。二人とも強そうで、一人は手に何か持っているようです。

その若者たちから危害を加えられる、と考えますか。当然、かつて自分が経験した事柄から判断して、用心すべきだと思うかもしれませんが。しかし、**それら二人の若者を危険人物だと結論するのは、本当に正当なことでしょうか。**さらに踏み込んで言えば、自分はその二人をどの人種、どの民族の人と想像しているのでしょうか。この問いに対する答えから、気づいていなかったことが明らかになる場合もあります。自分がすでに幾らか偏見を抱いていることが分かるかもしれません。

自分に正直であるなら、だれしも心の奥深くに、程度の差こそあれ何らかの偏見を抱いていることを認めざるを得ません。聖書もその事実を認め、ごく一般的な偏見について、「人は人を外見で判断する」と述べています。(サムエル第一 16:7,「現代英語訳」)では、どんな人にもこの人間的傾向があり、しばしば不幸な結果が生じるのであれば、生活の中で偏見を克服あるいは排除することは可能なのでしょうか。また、全世界から偏見がなくなる時は来るのでしょうか。



あなたは、
このような状況に
直面したら、
どんなことを考えますか

世界中から偏見がなくなる いつ？

「わたしには夢がある」。今から50年前の1963年8月28日、米国の公民権運動の指導者マーチン・ルーサー・キング2世が、最も有名な演説の中でそう言いました。キング牧師は、人を引きつけるその言葉を繰り返して、いつの日か人々が人種偏見のない生活を楽しむようになるという自分の夢つまり希望を言い表わしました。その願望は米国の聴衆に向けて語られたものですが、夢の本質的な部分は多くの国の人々にも受け入れられてきました。



© Bob Adelman/Corbis

公民権に関する
演説をしている、マーチン・
ルーサー・キング2世

その演説の3か月後、1963年11月20日には、100余りの国々が、あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際連合宣言を採択しました。その後の数十年間に、他の世界的規模の行動計画も採択されました。そのような大々的な努力が払われたのですから、当然、それはどんな結果をもたらしてきたのか、という問いが生じます。

2012年3月21日、パン・ギムン国連事務総長はこう述べました。「人種主義、人種差別、外国人排斥、およびそれに関連した不寛容を防ぐとともに一掃するための、価値ある条約や手段が数多くある。また、そのための包括的な世界的規模の枠組みもある。にもかかわらず、今なお人種主義が原因で世界中の多くの人々が苦しんでいる」。

人種主義その他の偏見との闘いの点で幾らか成功している国や地域においてさえ、いまだに次のような疑問が残っています。そうした進歩によって本当に人々の根強い偏見が取り除かれたのでしょうか。それとも、単に偏

見が表に出ないようにされただけでしょうか。それは差別を防ぐ一助となるだけで、**偏見**を根絶する点では無力だ、と考えている人もいます。なぜそうなのでしょう。なぜなら、差別は目に見え、法律で処罰できる行為であるのに対し、偏見は人々の内奥の考えや感情に関連した、容易には規制できないものだからです。

ですから、偏見を根絶しようとする試みは、差別行為を単に抑制するだけではなく、特定の集団の人々に対する考えや気持ちをも変えさせるものでなければなりません。しかし、そのようなことが本当に可能でしょうか。可能だとしたら、どのようにしてするのでしょうか。では、そうした変化を遂げられること、またそうするのに助けになるものがあることを理解するために、幾つかの実例を見てみましょう。

偏見を克服するのに聖書が助けになった

リンダ：わたしは、南アフリカで生まれました。そして、南アフリカの白人以外の人々を、劣った、教養のない、信頼できない人、また白人に仕える人とみなしていました。それは、偏見にとらわれていたからです。そのことに気づきもしませんでした。しかし、そうした態度は、聖書を学ぶようになって変わり始めました。わたしは、『神が不公平な方ではない』こと、また肌の色や話す言語より心のほうが重要であることを知りました。（使徒 10:34, 35。箴言 17:3）また、フィリピ 2章3節を読んで、どの人をも自分より上と考えれば偏見は克服できる、ということが分かりました。そうした聖書の原則に従うことにより、他の人の肌の色がどうであれ、その人に関心を払えるようになってきました。そして今では、偏見へのとらわれから解放されたように感じています。

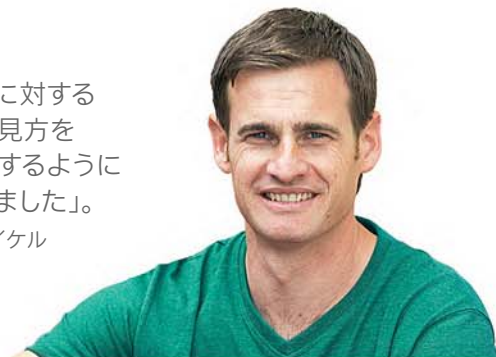
「偏見へのとらわれから
解放されたように
感じています」。

—リンダ



「人々に対する
神の見方を
理解するよう
になりました」。

—マイケル



マイケル：わたしは、オーストラリアの、住民の大半が白人の地域で育ち、アジア人、特に中国人に対する非常に強い偏見を持つようになりました。車を運転していてアジア系の人を見かけると、窓を開けて、「国へ帰れ！ アジア人」などと口汚く叫びました。後に、聖書を学び始め、人々に対する神の見方を理解するようになりました。神は人々を、どの国の出身か、どんな外見をしているかに関係なく、愛しておられます。わたしはその愛に感動し、憎しみを捨てて愛を培いました。そのような劇的な変化を経験するのは、驚くべきことです。今では、あらゆる国の様々な背景の人々との交友を大いに楽しんでいます。それによって、人生観が大きく変わり、喜びが増し加わっています。

サンドラ：わたしの母は、ナイジェリアのデルタ州にあるウムネデという町の出身ですが、父の親族は、エド州の出身で、エサン語を話します。そうした違いがあったため、母は、死ぬまで父の親族からのひどい偏見に悩まされていました。それで、わたしは、エサン語を話す人とは関わりを持たない、またエド州出身の人とは絶対に結婚しない、と心に誓いました。でも、聖書を学び始めて、物



事をそれまでとは違った観点から見るようになりました。神は不公平な方ではなく、神を恐れる人はだれでも神に受け入れられる、と聖書が述べている以上、人を部族や言語の違いを理由に憎むことなどできません。それで、わたしは自分の考え方を調整し、父の親族と仲直りして穏やかな気持ちになりました。聖書の様々な原則を当てはめたことで、幸福になり、平安な日々を過ごしています。また、他の人と、その生い立ち、人種、言語、国籍などには関係なく、仲良くやってゆけるようになりました。そして、わたしが結婚した相手は、なんとエド州出身の、エサン語を話す人なのです。

それらの人や他の多くの人が根強い憎しみや偏見を克服するうえで、聖書が助けになったのはなぜでしょうか。それは、聖書が神の言葉だからです。聖書には、人の考え方や他の人々に対する感じ方を変化させる



「自分の考え方を調整し、
……穏やかな気持ちになりました」。
—サンドラ



力があります。それだけでなく、偏見すべてをなくすために必要な他の事柄についても、聖書は明らかにしています。

神の王国が偏見すべてをなくす

強い感情を制するにも捨て去るにも聖書の知識が助けになるとはいえ、偏見を完全になくすためには、ほかにも取り組まなければならない問題が二つあります。一つは、人間の不完全さと罪です。聖書ははっきりと、「罪をおかさない人はひとりもない」と述べています。(列王第一 8:46) ですから、わたしたちは、いくら努力しても過ちを犯してしまい、「自分では正しいことをしたいと願うのに、悪が自分にある」と書いた使徒パウロと同様の葛藤を経験します。(ローマ 7:21) 時々、不完全な心に促されて、偏見につながる「害になる推論」をしてしまうのは、そのためです。—マルコ 7:21。

二つめに、悪魔サタンの影響があります。聖書によれば、悪魔は「人殺し」で、「人の住む全地を惑わして」いま

す。(ヨハネ 8:44。啓示 12:9) だからこそ、世界中に偏見がはびこり、人類は偏狭、差別、集団虐殺など、異なる人種や宗教や社会的階層に対する不寛容を前にして非常に無力なのです。

ですから、偏見が全くなくなるためには、人間の罪と不完全さ、および悪魔サタンの影響が除かれなければなりません。聖書は、神の王国がまさにそのことを成し遂げる、と教えています。

イエス・キリストは、神に「あなたの王国が来ますように。あなたのご意志が天におけると同じように、地上においてもなされますように」と祈るべきことを弟子たちに教えました。(マタイ 6:10) 神の王国こそ、あらゆる不寛容や偏見を含め不正すべてをなくすための手段なのです。

神の王国が来て地上の物事を掌握する時、サタンは『縛られ』つまり完全に拘束されて、『諸国民を惑わすことができなく』なります。(啓示 20:2, 3) その時、「新しい地」つまり新しい人間社会が実現し、そこには「義が宿ります」*。—ペテロ第二 3:13。

義にかなったその人間社会に住む人々は、やがて完全になり、罪から解放されます。(ローマ 8:21) 神の王国の臣民として、『害することも損なうこともしません』。なぜなら、「地は必ずエホバについての知識で満ちるから」です。(イザヤ 11:9) その時には、すべての人がエホバ神の道を学んで、神の愛あるご性格に倣います。それによって、まさしくすべての偏見がなくなるのです。「神に不公平はないからです」。—ローマ 2:11。■

* 神の王国とそれが間もなく成し遂げる事柄について、詳しくは、エホバの証人の発行した「聖書は実際に何を教えていますか」という本の第3章、第8章、第9章をご覧ください。

エホバは『不公平な方ではない』

あなたは差別を受けたことがありますか。肌の色や民族的背景や社会的地位が異なるという理由で、要望を受け入れてもらえなかったり、サービスを拒否されたり、あるいは軽蔑されたりしたことがありますか。あるとしても、それはあなただけではありません。人がそのようにして他の人に屈辱を感じさせることはよくありますが、神が人にそうなさることはありません。クリスチャンの使徒ペテロは、全き確信を抱いて、『神は不公平な方ではありません』と言いました。—使徒 10:34, 35を読んでください。

ユダヤ人であったペテロがそう言ったのは、極めて異例な場面すなわちコルネリオという名の異邦人の家でのことであり、ユダヤ人が異邦人を汚れているとみなし、どんな交友も許されないと考えていた時代です。では、ペテロがコルネリオの家に行ったのはなぜでしょうか。それは、二人が知り合うようエホバ神が導かれたからです。ペテロは神からの幻の中で、「神が清めたものを汚れていると呼んではならない」と言われたのです。ペテロは知りませんでしたが、その前日、コルネリオも幻を与えられ、その中で天使から『ペテロを呼びなさい』という指示を受けていました。(使徒 10:1-15) ペテロは、その出来事にエホバの介入を認めると、ためらうことなくコルネリオと話しました。

ペテロは、『神が不公平な方ではない、ということがはっきり分かります』と言いました。(使徒 10:34, 35) 「不公平な方」と訳されているギリシャ語の字義は、「顔を受け取る者」です。(「ギリシャ語聖書 王国行間逐語訳」[英語]) この語に関して、ある学者は、「人の顔を見て、つまり事の理非によってではなく、当人に対する自分の好き嫌いの感情によって判決を下す裁判官を指す」と説明しています。ですから、神が人の顔を別の人の顔以上に、人種、国籍、社会的立場、あるいは他の何らかの外的要素

ゆえに好意的にご覧になる、ということはありません。

エホバは、顔ではなく心にあるものをご覧になります。(サムエル第一 16:7。箴言 21:2) ペテロは、『神は不公平な方ではない』と述べたあと、「どの国民でも、神を恐れ、義を行なう人は神に受け入れられる」と言いました。(使徒 10:35) 神を恐れるとは、神を尊び、敬い、信頼し、神に不快な思いをさせないということであり、義を行なうとは、神の目から見て正しいことを進んで行なうことです。エホバは、人が心に抱く畏敬の念に促されて正しいことを行なうとき、喜ばれるのです。—申命記 10:12, 13。

エホバは天から見下ろし、 人類を単一の種族として ご覧になる

差別されたり偏見を持たれたりしたことがある方なら、きっとペテロの言葉に元気づけられることでしょう。エホバは、あらゆる国の人々を真の崇拜に引き寄せておられます。(ヨハネ 6:44。使徒 17:26, 27) そして、ご自分を崇拜する人の人種や国籍や社会的立場には関係なく祈りを聞いてこたえ応じられます。(列王第一 8:41-43) わたしたちは、エホバが天から見下ろし、人類を単一の種族としてご覧になる、ということを確認できます。あなたも、公平なこの神についてもっと知りたいと思われるのではありませんか。■

6月の聖書通読の範囲

ヨハネ 17章-使徒 10章



幾世紀も 埋もれていた宝

その学者は目を疑いました。古代写本のその1枚を注意深く何度も調べ、その書体と文法から、自分の目の前にあるのはグルジア語聖書の翻訳の断片で、現存する最古のものだ、と確信しました。

その宝は、1922年12月末に発見されました。グルジア大学の研究者イワネ・ジャワヒシュベリがグルジア語アルファベットの発達過程を研究していた時のことです。エルサレム・タルムードの写しを手にし、それを調べている最中に、そのヘブライ語本文の下に、一部消されたグルジア文字が見えたのです*。

タルムードの本文の下にあって気づかれなかったその文は、聖書のエレミヤ書の一部であり、西暦5世紀に書き写されたものでした。これが発見されるまで、グルジア語聖書の最古の写本として知られていたのは、西暦9世紀のもんです。やがて、西暦5世紀やそれ以前の、聖書の他の書の一部が見つかりました。考えてみてください、イエスと使徒たちの時からほんの数百年しかたっていない聖書の“紙”が発見されたのです。

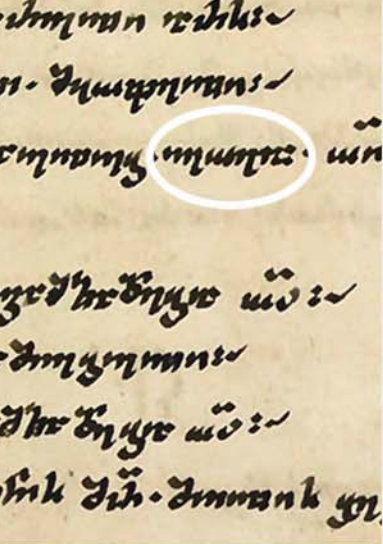
だれがその翻訳を行なったのでしょうか。一人の人に

* 古代には、書写用の“紙”は希少で高価なものでした。ですから、写本から古い本文を擦り取り、その“紙”を再利用して新たに文字を書くことは、普通に行なわれていました。そのような文書は、パリンプセスト(重記写本)と呼ばれています。「擦って再びきれいにされた」という意味のギリシャ語に由来する用語です。

よるものでしょうか、それとも数人の献身的な翻訳者たちによるものでしょうか。これまでのところ、その答えとなるような、歴史の記録は発見されていません。いずれにせよ早くも4世紀には、神の言葉 聖書が、少なくともその一部はグルジア語に翻訳され、以来グルジア人にも母語で読めるものとなり、広く知られてきたことは明らかです。

グルジアの人々が聖書をどれほどよく知っていたかを物語る記述が、5世紀末に書かれたと思われる「聖シュシャニク女王の殉教」(グルジア語)という本の中に見られます。著者は、女王の悲劇的物語の中に、聖書の詩編や福音書その他の書からの引用句や、暗に聖句に言及した言葉を含めています。また、グルジアのカルトリ王国の総督であった、シュシャニクの夫ワルツケンが、ペルシャの君主たちをなだめようと、“キリスト教”を捨ててペルシャのゾロアスター教に改宗し、妻にもそうするよう要求した、とも述べています。その本によれば、女王は自分の信仰を捨てようとはせず、最期の日々、聖書から慰めを得ていました。

その5世紀以降、グルジア語聖書の翻訳と写本は、一度



National Center of Manuscripts

グルジア語聖書に見られる神の名

神はご自身を聖書中にエホバ(ヘブライ語, יהוה)という固有名で明らかにしておられます。その名は原語の聖書写本に約7,000回出てきます。グルジア語訳の大半では、神の名が「主」という称号に置き換えられてきました。しかし、スルハン・サバ・オルベリアニは、いわゆる「サバ聖書」の付録の中で、イエスという名の意味を「イエス: ヘブライ語に由来: 主なるイエオバは救い主」と説明しています。幸い、エホバの証人が2006年に発行した「グルジア語聖書 新世界訳」には、エホバという神の名がそのあるべき箇所すべてに出ています。

も途絶えなかったようです。グルジア語の聖書写本の数が多いことは、献身的な写本家や翻訳者たちの労苦を証^{あか}しするものです。では、その感動的な歴史の二つの面、すなわち聖書の翻訳と印刷について調べてみましょう。

聖書翻訳の急増

「自分の低い修道士である私ギオルギが、精励刻苦して、この『詩編』を近代ギリシャ語からグルジア語に翻訳いたしました」。これは、西暦11世紀のグルジア人修道士ギオルギ・ムタツミンデリの言葉です。グルジア語聖書がすでに幾世紀も前から存在していたのに聖書を翻訳する必要があったのは、なぜでしょうか。

11世紀になるまで、グルジア語聖書の初期の手書き写本は、まだごくわずかしかなく、聖書の一部の書はそっくりなくなっていました。また、グルジア語も多少変化していて、初期の写本を読んで理解することは困難でした。グルジア語聖書を復活させようと努力した翻訳者は少なくありませんが、特に大きな役割を果たしたのがギオルギです。ギオルギは、現存していた幾つかのグルジア語訳をギリシャ語写本と照らし合わせて、欠落していた箇所を翻訳し、一部の書についてはそれらを全訳することさえしました。日中は修道院の長としての務めを果たし、夜間に聖書を翻訳したのです。

ギオルギの仕事をさらに一歩進めたのは、ギオルギと

同時代のエフREM・ムツィレです。エフREMは、翻訳者たちのための指針となる型を作り上げました。それには、できれば原語から訳すことや、原文にしっかり付き従うものの訳文の自然さを犠牲にしないことなど、翻訳の基本的な諸原則が含まれています。エフREMは、グルジア語訳に脚注や欄外参照を載せることも始めました。また、聖書の数々の書を全く新しく翻訳しました。ギオルギとエフREMのした仕事によって、その後の翻訳活動の堅固な基礎が据えられたのです。

その後の100年、グルジアでは一般の文学作品が数多く生み出されました。ゲラティやイハルトという町には大学が創設されました。今日、グルジア国立写本センターで保管されている、いわゆる「ゲラティ聖書」は、ゲラティやイハルトにいた学者たちの一人による全く新しい聖書翻訳である、と考えられています。

こうした聖書翻訳の活動はグルジアの人々にどんな影響をもたらしたのでしょうか。12世紀にグルジアの詩人ショータ・ルスタバリが、「虎の皮を着た勇士」(グルジア語)という叙事詩を書きました。これは、グルジア人の第二の聖書と呼ばれるほど、今まで何世紀にもわたって人々を感化してきた作品です。現代のグルジアの学者K・ケケイリッツは、その詩が聖書からじかに引用されたものかどうかはさておき、「ルスタバリの見解は様々な聖句をそのまま反映したものである」と述べています。そ

の詩は、非常に空想的に表現されてはいますが、本当の友情、物惜しみしない精神、女性を尊ぶ態度、見知らぬ人に対する無私の愛といったテーマを扱っていることが少なくありません。聖書の教えであるそうした価値観は、グルジア人の何世代にもわたる考え方に影響を与え、今でも人々の道徳上の理想と考えられています。

聖書の印刷 — 王室の関心事

17世紀末、グルジア王室は、聖書が印刷されることを

グルジアにおけるキリスト教

キリスト教はいつ頃グルジアに伝わったのでしょうか。これまでのところ、一般の記録の中に根拠の確かなものは見つかっていません。しかし、「使徒たちの活動」の書によれば、西暦33年のペンテコステの時、エルサレムで良いたよりを聞いた人々の中に、ポントスから来たユダヤ人や改宗者が幾人かいました。それらの人は帰国して、郷里でキリスト教の音信を広めたことでしょう。西暦62年頃にはポントスに幾つかのクリスチャン会衆が存在していたようです。1世紀のポントスとは、現在のトルコ北東の端にある、グルジアに隣接する地域のことでした。—使徒2:9。ペテロ第一1:1。



切望していました。それで、王ワフタング6世は、首都トビリシに印刷所を建てました。しかし、聖書の本文は印刷できるまでになっていませんでした。グルジア語聖書は、ある意味で再び埋もれていました。聖書の幾つかの部分の不完全な写本しか入手できず、そのグルジア語も古くなっていたのです。それで、聖書本文の改訂・修復作業が、言語学の専門家スルハン・サバ・オルベリアニに委ねられました。

オルベリアニは良心的にその仕事に取りかかりました。ギリシャ語やラテン語をはじめ幾つかの言語を知っていたので、当時存在していたグルジア語写本のほかに別の文献も調べることができました。しかし、偏見のないその取り組み方は、グルジア正教会に受け入れてもらえませんでした。正教会の僧職者たちはオルベリアニを教会に対する裏切り者と非難し、王を説得して彼に聖書関係の仕事を辞めさせました。グルジア語のある本によれば、教会会議の時、僧職者たちはオルベリアニがそれまで幾年もかけて改訂・修復していた聖書を強制的に焼き捨てさせました。

意味深いことに、今日まで残存している、「サバ聖書」とも呼ばれるムツヘタ写本の一つには、オルベリアニの手書きの注釈が含まれています。しかし、これが僧職者たちの闘いの対象となった聖書なのかどうかは分からない、と言う人たちもいます。ただ付録資料だけは確かにオルベリアニによるものとされています。

王室の一部の人たちにとって聖書の印刷は、容易なことではなかったにもかかわらず、依然として優先事項でした。それで、1705年から1711年にかけて、聖書の幾つかの書が印刷され、その後バカリ王子とワフシュティ王子の尽力により、1743年、ついに聖書全巻が印刷されました。もはや埋もれたままになることはないのです。■



聖人に祈るのはふさわしいことですか

だれでも、心配事がある時には、だれかに助けを求めたくなるものです。心配の原因が何であるかにもよりますが、恐らくは、自分の気持ちを分かってくれて、同じような問題を経験した友人に相談することでしょう。同情心があり経験も豊かな人は本当に望ましい友である、と言えます。

祈りについても同じように感じる人がいることでしょう。あまりにも気高く畏怖の念を起こさせるような神に祈るよりは、聖人に祈るほうが緊張しないですむように感じるのです。人間に共通の試練や辛苦を経験した聖人たちのほうが親身になって聞いてくれる、と考えます。例えば、とても大切な物をなくした人は、失った物や盗まれた物の守護聖人とされている、パドバの“聖”アントニウスに祈りで近づくことを好むかもしれません。また、病気を治してもらおうとして祈る人は“聖”アルフォンソを選ぶかみしれず、何かがだめになりそうで絶望的になっている人は“聖”ユダ・タデウスに祈るかもしれません。

では、聖人に祈ることが、聖書の教えどおりのふさわしいことなのかどうか、どうすれば確かめられるでしょうか。祈りは神にささげるものなので、自分のささげる祈りが神に聞かれているかどうか、知りたいと思うはずですが。また、聖人に対する祈りを神はどう思っておられるのだろう、と考えるのも良いことです。

聖人にささげる祈り―聖書の見方

聖人に祈る習慣は、カトリック教会の、聖人による執り成

しに関する教理に基づくものです。その基本的な概念は、「新カトリック百科事典」(英語)によれば、「神の目から見ても嘆願する権利を持つ者が、困窮している者たちのために^{あわ}憐れみを嘆願すること」です。ですから、聖人に祈る人は、聖人が神の前で祝福された立場にあるゆえに聖人を通して特別の恵みを得られるかもしれない、と考えているのです。

聖書はそのような教理を教えているでしょうか。ある人たちは、使徒パウロが自分の書簡の中で聖人への祈りの基盤を据えた、と言います。例えば、ローマにいるクリスチャンに宛てた手紙の中で、「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストにより、また霊の愛によってあなた方に勧めます。わたしのため、神への祈りにわたしと共に励んでください」と書いています。(ローマ 15:30) パウロは仲間のクリスチャンに、神の前で自分のために執り成しをしてくれるよう頼んでいたのでしょうか。いいえ、そうは考えられません。執り成しだとしたら、それらのクリスチャンたちのほうが、キリストの使徒であったパウロに頼むはずですが。パウロが述べていたのは、神に祈ってくれるよう仲間のクリスチャンに頼むのはふさわしい、ということでした。しかしそれは、天にいてと考えられているだれかに、自分の願い事を神に知らせてくれるよう祈ることとは違います。なぜそう言えるでしょうか。

ヨハネの福音書の中でイエスは、「わたしは道であり、真理であり、命です。わたしを通してでなければ、だれひとり父

のもとに来ることはありません」と述べています。(ヨハネ 14:6) また、「わたしの名によって父に願うものは何でも与えられる」とも述べています。(ヨハネ 15:16, 「新共同訳」, 共同訳聖書実行委員会) イエスは、『わたしに祈りなさい。そうすれば、わたしがあなたの方のために神に願い出てあげよう』と言っていたのではありません。神に祈りを聞いていただくためには、イエス以外のだれかではなくイエスを通して神に祈らなければならない、ということなのです。

イエスは、弟子たちから祈りの仕方を教えてほしいと言われて、「いつでもあなたが祈るときには、こう言いなさい。『父よ、あなたのお名前が神聖なものとされますように。』」と述べました。(ルカ 11:2) そうです、祈るときには「いつでも」、イエスや他のだれかにではなく、神ご自身に祈るべきです。イエスがそのようにはっきり教えたのですから、祈りは、だれか執り成しをする者や“聖人”にではなく、イエスを通して神にささげるべきである、と結論するのは筋の通ったことではないでしょうか。

祈りは崇拜の非常に重要な一部であり、崇拜を神以外のだれかにささげるのは明らかに聖書の教えに反しています。(ヨハネ 4:23, 24。啓示 19:9, 10) ですから、祈りも神にだけささげるべきなのです。

神に近づくのを恐れるべきか

イエスは、山上の垂訓の中で、子どもが父親に食べ物を求めることを例に挙げました。父親が自分の子にパンの代わりに石を与えたり、魚の代わりに毒へびを与えたりするでしょうか。(マタイ 7:9, 10) 愛情深い親がそのようなことをするとは考えられません。

同様の例えを親の観点から考えてみましょう。お子さんがあなたに、ある願い事をぜひかなえてほしいと思っています。あなたはお子さんとの良い関係を大事に育てて、常に近づきやすい存在となっています。それなのに、その子が根拠もなくあなたの反応を恐れて、願い事をあなたに伝えてくれるようだれかに頼みます。どんな気持ちになりますか。その子がいつもそのだれかを通してでなければあなたと意思をうれ通わせず、今後もそうするつもりでいるとしたら、どうでしょう。そのような取り決めを嬉しく思いますか。そんなことはないでしょう。愛情深い親なら、子どもがじかに近づいて来て、必要な物を気兼ねなく願い求めてほしい、と思うものです。



子どもを持つ愛情深い父親のように、神は、わたしたちがご自分と意思を通わせることを望んでおられる

イエスは群衆に、食物を求める子どもの例えの適用をこう述べました。「それで、あなた方が、邪悪な者でありながら、自分の子供たちに良い贈り物を与えることを知っているのであれば、まして天におられるあなた方の父は、ご自分に求めている者に良いものを与えてくださるのです」。(マタイ 7:11) 親が自分の子どもに良いものを与えたいと思う気持ちは、確かに、強いものです。しかし、天の父がわたしたちの祈りを聞いてそれに答えたいと思われる気持ちは、はるかに強いのです。

神は、わたしたちが自分個人の欠点に打ちひしがれているとしても、祈りによって直接ご自分に近づいてほしいと思っておられます。わたしたちの祈りを聞く務めを他の者に割り当ててはられません。聖書には、「あなたの重荷をエホバご自身にゆだねよ。そうすれば、神が自らあなたを支えてくださる」と述べられています。(詩編 55:22) 聖人やだれかの執り成しに頼るのではなく、エホバ神に対する健全な見方を身につけるのは良いことです。

天の父はわたしたち個人個人を顧みてくださっています。問題を抱えるわたしたちを助けたいと思っておられ、ご自分に近づくよう招いてくださっています。(ヤコブ 4:8) わたしたちにとって、「祈りを聞かれる方」である神また父に近づく機会があるのは、なんと嬉しいことでしょう。— 詩編 65:2。■



ある犯罪者との 会話から 何を学べますか

その犯罪者とは、このさし絵の、イエスが話しかけている
ひとです。自分の犯した罪を後悔して、イエスに、「あなた
がご自分の王国に入られる時には、わたしのことを思い
出してください」と言ったので、イエスがその人と話して
いるところです。何と言っているか分かりますか。—
イエスは、「今日あなたに真実に言いますが、あなたは
わたしと共にパラダイスにいますでしょう」と約束している
のです。

パラダイスとは、どんな所だと思えますか。— その
答えを知るために、神が最初の人間アダムとエバのため
に造られたパラダイスについて考えてみましょう。その
パラダイスはどこにありましたか。天でしょうか。それ
とも、地上でしょうか。—

そう、地上ですね。ですから、その犯罪者が「パラダ
イスにいる」というのは、この地上がパラダイスになっ
た時にその人がそこにいるということです。そのパラ
ダイスはどんな所でしょうか。— 考えてみましょう。

聖書には、エホバ神が最初の人間夫婦アダムとエ
バを創造して、二人をこの地上の楽園つまりパラダイ
スに置かれた、と述べられています。そこは“エデン
の園”と呼ばれました。“エデンの園”がどれほど美
しい所だったか、想像できますか。— そうです、だれも
見たことがないほど美しく住みやすい所でした。

では、どう思えますか。イエスは、罪を後悔したそ
の犯罪者と共にこの地上にすることになるのでしょうか

* お子さんと一緒に読んでいるのであれば、タッシュ(ー)の所で休止を
入れ、お子さんの答えを聞いてみるができます。



か。— そうではありません。イエスは天^{てん}にいて、パラ
イスとなる地上^{ちじょう}を王^{おう}として支配^{しはい}するのです。ですから、イ
エス^{はんざいしゃ}がその犯罪者^とと共にいるというのは、その人^{ひと}を死人^{しにん}
の中から生き返^{かえ}らせて地上^{ちじょう}のパラダイスで世話^{せわ}を受け
られるようにする、ということです。でも、なぜイエスは
犯罪者^{はんざいしゃ}だった人^{ひと}をパラダイスに住^すまわせるのしょう
か。— そのことについて考^{かんが}えてみましょう。

確^{たし}かに、この犯罪者^{はんざいしゃ}はとても悪^{わる}いことをしました。
しかし、かつて地上^{ちじょう}で生きた人^{ひと}や今生きている人^{いまい}につ
いても同じことが言えま^{ひと}す。人々が悪^{おな}いことをするの
は、大抵^{たいてい}の場合^{ばあい}、エホバやエホバが望^{のぞ}んでおられるこ
とについて教^{おし}えてもらったことがないからです。

それで、そのような人^{ひと}々も、また杭^{くい}につけられたイ
エスが話^{はな}しかけた犯罪者^{はんざいしゃ}も、この地上^{ちじょう}のパラダイスに
復活^{ふっかつ}してきて、神^{かみ}のご意志^{いし}を教^{おし}えてもらえます。その
時^{とき}には、エホバを愛^{あい}していることを証明^{しょうめい}できます。

どのように証明^{しょうめい}できるか、分^わかりますか。—
神^{かみ}の望^{のぞ}んでおられることを行^{おこ}なうことによって
証明^{しょうめい}できます。その時^{とき}、パラダイスで生活^{せいかつ}し、
エホバを愛^{あい}し互^{たが}いに愛^{あい}し合^あう人^{ひと}々といつも
一^{いっしょ}緒^{じょ}にいられるのは、なんと素晴^{すば}らしいこと
でしょう。■



聖書^{せいしよ}から読みま^よしょう

ルカ 23:32-43

創世記^{そうせいき} 2:7-9

啓示^{けいじ} 21:3-5



世界平和がなかなか 実現しないのはなぜですか

聖書は、主な理由を二つ挙げています。第一に、人間は驚くべき事柄を成し遂げてきたとはいえ、自分の歩みを導く能力を持つ者としては造られていないからです。第二に、平和を達成できないのは「全世界が邪悪な者の配下にある」からです。その邪悪な者とは悪魔サタンです。そうした原因ゆえに、人間は努力しても世界平和をもたらせないのです。—エレミヤ 10:23; ヨハネ第一 5:19を読んでください。

また、世界平和がなかなか実現しないのは、人間が利己心や野心を抱くからでもあります。世界平和をもたらすことは、だれもが正しいことを愛し、互いに気遣いを示し合うよう人々を教えることのできる世界政府でなければ不可能です。—イザヤ 32:17; 48:18, 22を読んでください。

地上に平和を確立するのは だれですか

全能の神は、全人類を治めるただ一つの政府を設立する、と約束されました。その政府は人間の諸政府に取って代わります。(ダニエル 2:44) 神の子イエスが、その政府の“平和の君”として支配し、全地から悪を除き去り、人々に平和の道を教えるのです。—イザヤ 9:6, 7; 11:4, 9を読んでください。

すでにイエスの指導のもと世界中で幾百万という人が、神の言葉 聖書を用いて人々に、どうすれば他の人たちと平和に過ごせるかを教えています。間もなく、世界平和は現実のものとなります。—イザヤ 2:3, 4; 54:13を読んでください。

ウェブサイトでは聖書の
他の質問の答えも読めます

Fatmir Boshnjaku



世界平和をもたらせるのは、
人々の心を変えることのできる政府だけ



詳しくは、この本の
第3章をご覧ください
発行：エホバの証人

